東京外国語大学『語学研究所論集』第15号(2010.3), 131-150

〈論　文〉

ラトヴィア語のアスペクト対立とその表現の選択性

堀口　大樹

1. ラトヴィア語[1]のアスペクト概略

1.1. 先行研究概略 — “見出された”カテゴリー

ある言語の文法記述が，その言語内の様々な事象をカテゴリーとして取り出し整理していくことだとすると，文法記述をする者の母語や精通する言語が，記述のあまり進んでいなかった他のある言語の文法記述に少なからず影響を及ぼすことはあり得るであろう．ラトヴィア語のアスペクト理論の発展の歴史を概略すると，ラトヴィア語のアスペクトというカテゴリーはその一つの例であることがわかる．通言語的には，テンスや語彙的手段のように多種多様な表現がなされるアスペクトであるにも関わらず，アスペクトを文法カテゴリーとして有するスラヴ諸語（とりわけロシア語）の発達したアスペクト理論の影響を強く受けてきたからである．

Staltmaneは，リトアニア語を含むバルト諸語の動詞アスペクト理論の発展の歴史に触れ，「初期のバルト諸語の記述では，アスペクトのカテゴリーは言及されていない．初期のバルト諸語の文法記述者はドイツ人であり，アスペクトのカテゴリーがないドイツ語やラテン語の文法体系がバルト諸語の研究に持ち込まれた．本格的にこの問題が始まったのは19世紀末,バルト諸語とスラヴ諸語の動詞体系の比較歴史研究が始まってからである」としている．(Staltmane 1958b : 13) ドイツ人宣教師や言語学者によって 17—18 世紀にラトヴィア語の文法記述が始まった後，比較言語学，またアスペクト理論そのものが発展するに従い，バルト諸語と近縁関係にあり，すでに「体」という文法カテゴリーとしてのアスペクトの記述が整理され始めていたスラヴ諸語（特にロシア語）との比較対照研究により，バルト諸語にも「アスペクト」というカテゴリーが“見出される”ことになった[2]．　一見すると接頭辞という類似した形態的アスペ

---

[1] 本論中の例文は，Lursoft社によるLaikrakstu bibliotēka「新聞図書館」(http://www.news.lv)で閲覧可能な1991年以降の新聞記事のほか，雑誌，文学作品などを中心に筆者が集めたもの、または筆者が作文をし、インフォーマントの確認を受けたものである。

[2] 当時のアスペクト論に関する研究では，ロシア人の言語学者Ul’janovやFortunatov，ラトヴィア人ではEndzelīnsが挙げられる．それぞれの代表的論文は以下に記す．

Ul’janov, G.K.1895,*Značenija glagol’nyx osnov v litovsko-slavjanskom jazyke.II* Varšava.

Fortunatov, F.F.1897, *Kritičeskij razbor sočinenija G. K. Uljanova « Značenija glagol’nyx osnov v litovsko-slavjanskom jazyke »* Sankt-Peterburg.

Endzelin, Ja. 1908, K voprosu o vidovom značenii latyšskix složnyx glagolov. *« Izvestija Otdelenija*

クト表現をするラトヴィア語に，スラヴ諸語の持つ完了体・不完了体というアスペクト対立の型がラトヴィア語にもそのまま適応されることになったのである．

アスペクトという用語はラトヴィア語で veids[3]とされ，伝統的にパーフェクティヴ（以下 PFV）・インパーフェクティヴ（以下 IPFV）に分けられ，スラヴ語学の「完了体」，「不完了体」に相当する pabeigtais veids / nepabeigtais veids という用語もある．また veids のほかにも，aspekts や perfektīvs / imperfektīvs といった国際的用語も見受けられるほか，perfektīvs / imperfektīvs を形容詞として用いた perfektīvais veids/ imperfektīvais veids のようなラトヴィア語の用語と組み合わせた用語も用いられる．

1958 年の現代ラトヴィア標準語文法（Mūsdienu latviešu literārās valodas gramatika, 以下標準語文法）では，アスペクトを「動詞により表された動作の文法的特徴づけ」（標準語文法 1:564-582）とし，アスペクトが文法カテゴリーとして定着することになる．PFV は一般に「過程において限界のある動作」や「動作の開始や終了の時点，ある時間において完了したと認識される動作」を示す．それに対し IPFV は「動作の開始や終了時点に関係せず，継続中の動作，もしくは恒常的な状態」を示すとしている．（標準語文法 1 : 566）

本格的にラトヴィア語のアスペクト研究を行った最初の，そして現在のところ最後の研究者は Staltmane である．しかし，体の用法や限界性，全一性，体の不変体の追求といったロシア語学のアスペクト理論の発展を横目に，博士論文「現代ラトヴィア標準語における動詞アスペクト」[4]の執筆後に研究領域を変えた彼女以降，ソ連時代のラトヴィア語学におけるアスペクト研究は不思議なことに皆無であり，ラトヴィア語のアスペクトを詳細に扱った研究は，現在まで彼女の他に見当たらない．

接頭辞を中心とする形態的な（完了）アスペクト指標を持つ動詞のアスペクト研究を展開した Staltmane はアスペクト的意味を語彙的意味と区別し，アスペクト的意味やその表現に文法的性質を見出しつつも，（より）文法的なアスペクトと（より）語彙的なアスペクトであるアクツィオンスアルトの境界を段階的とし，その明確な区分けが非常に難しいことから，ラトヴィア語のアスペクトを「規則ではなく傾向として表現される，語彙・文法カテゴリー」とした．（Staltmane 1958b : 19）

---

russkogo jazyka i slovesnosti Imp. akd. nauk.» XIII, kn.4.

[3] ラトヴィア語語源辞典（Karulis. K. 1992 *Latviešu etimoloģijas vārdnīca.* Rīga.）によれば，名詞 veids は動詞 viest「気づく，感じる，見える」から派生した名詞で，リトアニア語の veidas「顔，頬」，ロシア語の vid「外見，（動詞の）体」，サンスクリット語の véda「知識，意識」，ギリシャ語の eidos「顔，外見」に対応している．

[4] Staltmane. V. 1958. *Verbu veidi mūsdienu latviešu literārajā valodā.* Doktora disertācija. Rīga.

ある言語事象が通時的に文法化へ志向するかどうか，文法カテゴリーと語彙的意味がどのように関わっているのか，またそもそも文法カテゴリーとは何か，文法的意味に対してしばしば対置されつつも実はあまり定義されることのない語彙的意味とは何か，といった難しい問題を鑑みると，この「語彙・文法的カテゴリー」という定義は妥協的ではありつつも，非常に的を射た定義である．しかし動詞の形態によるアスペクト表現に焦点を当てたことで漏れてしまっていた，テンスとアスペクトの関係や，両アスペクト動詞の位置づけ，アスペクトと動詞そのものの語彙的意味には触れておらず，今日までのラトヴィア語のアスペクト研究に課題を残している．

一方近年では Kalnača が機能文法主義の立場から，ラトヴィア語のアスペクトを動詞形態にとらわれない様々なレベルで表現される「典型的な機能意味論的カテゴリー」(Kalnača 2004 : 32)としている立場が興味深い．この新たな視点は，PFV・IPFV の対立を持つ文法カテゴリーとしてのアスペクト記述の枠組みを当てはめてしまったことであまり扱われてこなかった問題をより深く考察する手がかりになるだろう．

1.2. 形態的手段によるアスペクト表現

ラトヴィア語のアスペクト表現において，接頭辞は主要な形態的アスペクト表現である．11 の動詞接頭辞[5]は空間的意味を基本とするが，空間的意味は抽象化または脱語源化する．アスペクト的意味の付与の有無については，基動詞（無接頭辞動詞）の語義を大幅に変えずにアスペクト的意味を与える場合，アスペクト的意味を与えずに基動詞の語義を変える場合の 2 つのベクトルを持っている．前者の場合の接頭辞の意味は形式的意味，量・時間的意味，空間的意味と伝統的に分類される．

・形式的意味の接頭辞

IPFV の基動詞の語義を変えずに，PFV 化をする「空の接頭辞」「完了化接頭辞」とスラヴ語学で一般に呼ばれるような接頭辞は形式的意味の接頭辞と呼ばれる．どの接頭辞がどの IPFV の基動詞と結びつくと，その接頭辞動詞が対応の PFV になるのかは，基動詞の表す動作の方向性と接頭辞の空間的意味が一致する場合とされる．例えば IPFV の基動詞 rakstīt[6]「書く」には，「上」という空間的意味を持つ接頭辞 uz-が付加さ

---

[5] aiz-（離，閉，後），ap-（周），at-（離，開，戻），ie-（中），iz-（外，通過，分散），no-（下，離），pa-（下，過），pār-（越，家，移），pie-（接近），sa-（集），uz-（上）
前置詞としても存在する接頭辞には下線を記した．

[6] ラトヴィア語の動詞の不定形は-t で終わる．再帰動詞の不定形は-ties で終わる．

れたPFVの接頭辞動詞uzrakstītが対応するように，無接頭辞動詞と形式的意味を持つ接頭辞動詞はIPFV・PFVの対立をなす．この接頭辞付加によるアスペクト対立は，スラヴ諸語の「体」のような「文法カテゴリーとしてのアスペクト」の存在を期待させる[7]．例えば例文(1)の「買う」という動詞にはpirkt – nopirktというIPFV・PFVのアスペクトペアがある．

(1) Kad	citi	pirka	grāmatas,	viņš	nopirka	žurnālu.
When	other	buy, pf. past.	books	he	buy, pf. past.	magazine

他の人達が本を買っていたとき，彼は雑誌を買った．

・量・時間的意味の接頭辞と接尾辞によるアクツィオンスアルト

ラトヴィア語では，基動詞への接頭辞付加という形態操作を加えることで基動詞の示す動作に，動作の開始性，終了性，短期性，長期性，集中性，動作の主体や客体の多量性といったアスペクト的な意味グループであるアクツィオンスアルトが存在する．例えば，parunāt「(少し) 話す」，norunāt「(一定時間) 話す」，aizrunāties「話し始める」，norunāties「(疲れるまで) 話す」，izrunāties「(思う存分) 話す」などの接頭辞動詞がある．このアクツィオンスアルトに生産的に関与するのは接頭辞であり，これら接頭辞動詞の多くは，接頭辞により動作量や時間を限定されることから伝統的にPFVに分類される．例文(2)は，動作の一定の持続時間を示す接頭辞no-が付加された動詞norunāt「(一定時間) 話す」が用いられている。

接頭辞付加ほどの生産性はないが，一部の動詞への接尾辞付加[8]は多回性を表す機能がある．例えばbraukt「(乗り物で) 行く」に対し，braukātはその多回アスペクトである．このbraukātにさらに接尾辞付加を施したbraukalētも同様に[9]多回アスペクトの動詞である．

---

[7] しかし，スラヴ諸語のような第二次不完了化の手段はラトヴィア語にはなく，アスペクト的特徴づけがなされていない接頭辞動詞はPFV・IPFVの対立に無関与であり，アスペクト対立はすべての動詞に及んでいない．Staltmaneによれば，形式的意味の接頭辞は無接頭辞動詞の約半分に付加されるという．(Staltmane:1958.95)

[8] 多回性の接尾辞には -ī-, -ā-, -ē-, -inā-, -aļā-, -alē-, -elē-, -uļo-がある．また多回性の接尾辞付加は，基動詞の語幹の母音交替，子音交替，接中辞付加を引き起こすこともある．

[9] 接尾辞-aļā-, -alē-, -elē-, -uļo-には軽蔑の意味ニュアンスがあるとされる．(Soida 2009 : 197)

(2) Es visu dienu <u>norunāju</u> pa tālruni.
I all day talk, pf. past. on phone
私は一日中電話で話しっぱなしであった.

・空間的意味の接頭辞

接頭辞が本来の空間的意味を強く示すのは，具体的な物理的動作を示す基動詞と結びつく場合である．例えば基動詞 iet「行く」には，一連の接頭辞が付加され，ieiet「中へ行く（入る)」，iziet「外へ行く（出る)」といった接頭辞動詞が派生する．これらの接頭辞は動作の方向，したがって動作の目標を明確化しており，伝統的に PFV とされる．対応の IPFV は無接頭辞動詞と接頭辞の意味に対応する副詞を組み合わせた分析的構文で表す[10]．上記の例では，それぞれ iekšā「内部へ」，ārā「外へ」という副詞を添えた iet iekšā，iet ārā が対応する IPFV となる．例文(3)では動詞 ieiet「入る」が，同じく PFV 動詞の uzrakstīt と共に用いられている．

(3) Es <u>iegāju</u> istabā un uzrakstīju vēstuli.
I enter, pf. past. room and write, pf. past. letter
私は部屋に入り，手紙を書いた．

例文(4)では，vērties「(一度) 開閉する」から接尾辞付加によりできた virināties「(数回) 開閉する」と IPFV の動作を分析的に示す iet iekšā と(iet) ārā が用いられている．

(4) Nerimtīgi <u>virinājās</u> plašās durvis, cilvēki <u>gāja</u> <u>iekšā</u> un <u>ārā</u>.
incessantly open and close, impf. past. wide door people go, past. in and out
幅広のドアが絶えず開いたり閉まったりし，人々が出入りをしていた．

[10] ただしすべての空間的意味の接頭辞が副詞で置き換えられるわけではない．また無接頭辞動詞でも動作方向が明示されていると，「分析的構文」は選択的，あるいは余剰になる．例えば「来る」という動詞は明らかな物理的移動の動作を示すが，PFV の atnākt には分析的な IPFV の nākt šurp（šurp「こちらに」）よりも無接頭辞動詞の nākt「来る」の方が IPFV としてはずっと多く使われる．抽象化された空間的意味の接頭辞を持つ両アスペクト動詞でも「分析的構文」を取ることが可能である．特に過去における動作のプロセスの表現には一見空間的意味が薄れた接頭辞動詞 pie-dziedāt「伴唱する」よりも無接頭辞動詞による「分析的構文」の dziedāt līdzi が好まれる．（堀口 2009 : 62）このような選択的性格から，Kalnača は，「分析的構文」をアスペクト表現の「周辺」に位置づけている．（Kalnača 2004 : 25）よって形式的意味と空間的意味の接頭辞を持った PFV の動詞は，無接頭辞動詞の IPFV との関係において異なる性質を持つ．

1.3. 非形態的なアスペクト表現

・テンス　複合時制による結果性の表示

ラトヴィア語には単純時制と複合時制が存在し，それぞれ過去，現在，未来と合わせて6つの時制を有する．単純時制は発話時点を基準とした絶対テンスであるのに対し，複合時制は単純時制の示す時点よりも前に行われた動作を示す相対テンスであり，且つその動作が単純時制が示す時点に，何らかの形でアクチュアルとなっていることを示す[11]結果のアスペクト，いわゆるパーフェクトの機能を持つ．アスペクト対立は動詞のテンスのパラダイムに影響を及ぼすことはなく，複合時制でも対立は残る．

(5) Esmu	lasījis /	izlasījis	šo grāmatu,	tāpēc	zinu	saturu	no galvas.
be, pres.	read, impf. apastp.	read, pf. apastp.	this book	so	know, pres.	content	by heart

私はこの本を読んだことがあるので，内容を覚えている．

例文(5)では PFV が本を読み終わったことが明示されているのに対し，IPFV はそれを明示していない．Lokmane は「動詞が IPFV なら動作の過程そのものに焦点が置かれたり，動作の長さや多回性が表されるのに対し，PFV なら動作の完了性，結果性などが表される」(Lokmane 1988 : 115-116)と，アスペクト対立と複合時制の関係を指摘している．

・タクシス

タクシスは「複数の動作の同時性と複時性[12]（先行-後続）」(Bondarko: 2001.235-236)と一般に理解される，文レベルで現れるアスペクトである．完全な同時性の表現には IPFV，完全な順次性には PFV の動詞の並立が基本とされる．(標準語文法 2 : 605-613)

uzvarēt「勝つ」，aprakstīt「描写する」などはこれ自体 PFV・IPFV の対立に関与しない接頭辞動詞であるが，ひとたびタクシスを強く示す文中に組み込まれると，並立されている動詞のアスペクトが対立を持っていれば，文中で PFV か IPFV として用いら

---

[11] ただし，発話時点で動作結果がアクチュアルな場合,複合時制ではなく単純時制が使用される傾向と，その背景として考えられる，複合時制を持たないロシア語の影響が指摘されている．(Lokmane 1988 : 119)

[12] ある動作が終わらないまま次の動作が始まるよりも，ある動作が終わってから次の動作が始まる明確な区切れを持つ時間関係を示すため，本稿では「順時性」という術語を採用する．

れているかが判定できる．例えば例文(6)のような典型的な順時性のタクシスを表現するカエサルの発言では，「勝つ」は PFV として用いられている．

(6) Atnāca, ieraudzīja un <u>uzvarēja</u>.
come, pf. past. catch sight, past. and win, past.
来た，見た，勝った．

また例文(7)では最初の２つの PFV の動詞により文全体の動詞を PFV と見なせるが，形式的接頭辞 uz- と no- を取り IPFV にすれば，最後の接頭辞動詞 aprakstīja も IPFV とみなすことができる．

(7) Viņš uzzīmēja, nofotografēja un sīki <u>aprakstīja</u> ēkas.
he draw, pf. past. photograph, pf. past. and detailed describe, past. buildings
彼はデッサンをし，写真をとり，建物を細かく描写した．

・補語

Kalnača は格によりアスペクトを一部表現するフィンランド語を例にとり，ラトヴィア語の両アスペクトの動詞は動詞の補語によりどちらのアスペクトを表しているかを区別できるとしている．この際に動作の「具体性と一般性」の違いとしている．（Kalnača 2004 : 19）例えば Kalnača からの引用によれば，pārlasīt「読み返す」という接頭辞動詞は，例文(8)では IPFV, 例文(9)では PFV とされるという．(Kalnača 2004 : 19.)

(8) Vakar <u>pārlasīju</u> laikrakstus.
Yesterday reread, past. newspapers
（私は）昨日新聞を読み返した．

(9) Vakar pārlasīju visus jaunākos laikrakstus.
Yesterday reread, past. all newest newspapers
(私は)昨日最新の新聞をすべて読み返した．

PFV とされる例文(9)では，不定代名詞の viss, さらに限定語尾を持つ形容詞 jaunākos

が用いられ，例文(8)と比べると補語の定性が特徴付けられている[13].

目的語の他，動作が行われる時間表現も，アスペクト表現において重要な役割を担っている．動作の行われる時間は対格と位格で表すが，時間対格が IPFV と結びつきやすく，持続する動作の継続時間を示すのに対し，時間位格は持続した動作が完了するまでの所要時間を示し，PFV と結びつきやすい．例えば IPFV の risināt jautājumu vienu mēnesi「問題に 1 ヶ月間取り組む」に対し，PFV の atrisināt jautājumu vienā mēnesī「問題を 1 ヶ月で解決する」がある．Kalnača が例に出した両アスペクト動詞の pārlasīt も時間対格をとれば IPFV（pārlasīt grāmatu vienu stundu「1 時間本を読み返す」に，時間位格をとれば PFV（pārlasīt grāmatu vienā stundā「1 時間で本を読み返す」）に解釈できる．

以上のようにラトヴィア語では接頭辞や接尾辞といった形態的手段を中心に，文レベルのアスペクトであるタクシスといった統語的手段，テンス，また文中の様々な要素によりアスペクトが表現される．

2. アスペクト対立とその中和

2.1. アスペクト対立

アスペクトのそれぞれの対立項の中心にある不変体の意味と，具体的な場面で現れる個別的な意味の定義は難しい問題である．どちらか一方の項の特徴づけを行えば，もう一つの項の特徴が自動的に決定される欠如的対立の立場で PFV・IPFV の対立を見た場合，「言及時点が動作のカバーする距離（interval）の中に位置していることを示す同時性（simultaneity）」（Holvoet　2001 : 150）の有無が対立の特徴項となる．この特徴を持つのは IPFV であり，PFV はその特徴を決して持つことのできない．特にわかりやすいのは，発話時点に一致した進行中の動作である．以下の例文(10)は電話の会話である．ここでは PFV の動詞 piezvanīt，izdarīt ，sakārtot は用いない．

(10) — Hallo!　Šeit　zvana　Anna.　Ko　tagad　dari?
hello　here　call, impf. pres.　Anna　what　now　do, impf. pres.
— Es tagad　kārtoju　istabu.
I　now　arrange, pres.　room

[13] しかし例文(8)自体には複数の新聞の定性・不定性は明示されていないだけで，PFV にも解釈できるため最良の例文とはいえない．

— もしもし，アンナだけど．今何をしているの？
— 今部屋の整理をしているの．

しかし実際の言語活動において発話時点と動作の進行が完全に一致したり，また一致すると話者が感じることはそう多くはない．なぜなら現在時制は「この病院では年間 X 人が手術を行う」「年間 X 人がパスポートを紛失する」「地球は太陽の周りを回る」「この木は秋になると葉が落ちる」など一般的事実や事物の特性，恒常的真理なども広く示し，必ずしも発話時点での動作の同時性がアクチュアルになるとは限らないからである．

標準語文法ではアスペクトの付随的意味について，IPFV に「動作の習慣性[14]」を，PFV に「動作の成功裏の達成」を指摘している．（標準語文法 1 : 588）ここで付随的意味について考察を試みると，IPFV の動詞が動作の目標に向かうプロセスを明示するのに対し，PFV が動作の目標の達成を明示する．rakstīt – uzrakstīt「書く」のような動詞ペアとはその性格を異にしつつも，伝統的にペアとされる動詞には nākt – atnākt「来る」，risināt – atrisināt「解決する」，kārtot – nokārtot「試験を受ける，合格する」，glābt – izglābt「救助する」，meklēt – sameklēt「探す，探して見つける」，mirt-nomirt「死ぬ」などがある．このような動詞ペアは“（IPFV）して（PFV）できる”，“（IPFV）するけど（PFV）はできない”，“ずっと（IPFV）をしてやっと（PFV）ができる”といった一定の文脈内では，そもそもの語彙的意味が異なるようにすら感じられる．

(11) Eksāmenu <u>kārtoja</u> 50 cilvēku un to <u>nokārtoja</u> puse.
Exam take, past. people and it pass, past. half
試験を受けたのは５０人であり，それに合格したのは半数であった．

(12) Loma <u>nāca</u>, <u>nāca</u> un <u>atnāca</u>.
role come, impf. past. come, impf. past. and come, pf. past.
（女優が念願の役を手にして）役はめぐりにめぐってついにやってきた．

(13) Zirgu <u>glāba</u> astoņi cilvēki. Un <u>izglāba</u>.
horse rescue, impf. past. 8 people and rescue, pf. past.

[14] しかし習慣動作でも補語に具体的数量を伴うと PFV の動詞が用いられることが、次章を見るとわかる．

馬の救助には 8 人があたった．そして救助した．

(14) Miris, miris, bet nenomiris.

die, impf. apastp. die, impf. apastp. but not die, pf. apastp.

（彼は）長らく死にそうであったが，死ななかった．

しかし上で挙げたような一部の動詞だけではなく，tulkot – pārtulkot「訳す」，rakstīt – uzrakstīt「書く」といった PFV・IPFV の対立を持つ動詞も，一般に IPFV が動作の過程，PFV が動作の完了を示すが，このような文脈中では限界達成の志向と限界達成を表しうると考えられる．例えば例文(15)のような例文は許容される．

(15) Tulkotāji tulko, tulko, kamēr pārtulko.

translators translate, impf. pres. translate, impf. pres while translate, pf. pres.

翻訳家は翻訳をし終えるまで翻訳にずっと取り組む．

この限界達成と限界非達成（限界達成への志向）の対立は同時性・非同時性の対立のように，片方の項が持ちえるものが，もう片方の項では自動的に持ちえなくなる，といった対立の性格とは異なり，PFV が限界達成を明示するのに対し，IPFV はそれを明示しないにとどまっているだけである．言い換えると，IPFV は限界達成点を示さないだけで，実際には限界達成をしている場合がある一方で，例文(11)から(15)のような特殊な構文においては限界達成への志向のプロセスのみを示す．しかし例文(16)の IPFV 動詞 nākt「来る」は「来る途中である（が来ない）」の意味ではなく，uz treniņiem「練習へ」という目標点が示されているため，限界達成点を示す PFV 動詞である必要は必ずしもない．

(16) Trīs dienas nedēļā uz treniņiem nāk pieaugušie.

3 days week to trainings come, impf. pres. adults

週に 3 回大人たちが練習にやってくる．

例文(12)は，念願の役を 2 回オファーされつつも断念せざるを得ず，3 回目にしてやっとオファーを承諾した女優の発話であるが，このインタビュー記事のタイトル例文(17)に目をやると，

(17) Loma nāca trīs reizes.
role come, impf. past. 3 times
役は3回やってきた.

となっている．オファーを受けた（役を演ずるチャンスが近づいてきた）が結局断った最初の2回の IPFV の nāca と，3度目にやってきたオファーを引き受けた PFV の atnāca が例文(17)では IPFV の nāca に組み込まれている．このことから，PFV が表す限界達成は，限界達成点の表示の必要性が文脈上で大きくない場合（ここではオファーを受けた回数）には，IPFV が包括し，その場合 IPFV は限界達成に関与せず，単なる動作の名指しを行うにとどまる．ちなみにこの記事のタイトルに PFV の atnāca を用いると，女優は3回の役のオファーを3回とも引き受けたことになる．

よってラトヴィア語の接頭辞によりアスペクトペアをなす動詞の基本的な対立には「同時性」と「限界達成」の表示・不表示があるが，IPFV の限界達成の表示には不明瞭な側面があり，PFV・IPFV の対立を「限界達成・同時性」という対立に単純にまとめることはできないため，以下のような図にとどまらざるを得ない．

	PFV	IPFV
同時性	−	＋
限界達成	＋	＋−

2. 2. アスペクト対立の中和

アスペクト理論における中和（neutralization）とは，一般にアスペクト対立がある条件下で弱まり，どちらの項を使用しても発話内容に大きな違いが生じない現象とされ，中和の結果生じたアスペクトの類義性（synonymity）により競合（competition）が生じる．その中和が引き起こされる背景には文やコミュニケーション上の様々な要素が関係している．（Šeljakin 1983 : 23. Semikolenova 2002 : 177.）

形式的意味の接頭辞によるアスペクトペアを持つ動詞に限っていうと，絶対的な「同時性・非同時性」のアスペクト対立を持つ動詞が，発話時点での動作の同時性に関与しない一般現在で用いられることにより中和された場合，ラトヴィア語では PFV・IPFV の動詞を用いることができる．

ラトヴィア語におけるPFVの現在時制での使用は，完了体の現在形が一般に未来の意味を持つスラヴ諸語（特にロシア語）との対照[15]において珍しいものとして，しばしばラトヴィア語のアスペクト記述において言及される．一般にPFVが具体的動作を，IPFVが一般的動作を示すが，一般現在のPFVは不変の事実を確認したり，習慣や恒常的な動作を示す一般現在においては広くIPFVと同様に用いられる．しかし標準語文法で挙げられている例文では，空間的意味を持つPFVの接頭辞動詞がほとんどであり，形式的意味の接頭辞を持つPFVの動詞の現在時制での用例はほとんど記述されていない．

sacīt – pasacīt「言う」，solīt－apsolīt「約束する」といった発話動詞や遂行動詞のPFVの現在形に限って，PFVの現在形は表現性（expressive meaning）を与えるとされ，発することと同時に，動詞の示す動作が行われる"効果現在"（praesens effectivum[16]）とし，ラトヴィア語でも「PFVの現在時制は発話力と（発話の）断言的性格を強調する」としている．（Staltmane 1958c：198）Staltmaneの考察では，順時性が話題となるような脚本のト書きや文学作品の批評や概要，いわゆる歴史的現在（praesens historicum）とされる過去の事実の描写，取扱説明書のようなテキストにおいて，PFVの現在形がよく用いられるとしている．（Staltmane 1958c : 191-202）

形式的意味の接頭辞を持つPFV動詞がどのような機能や文脈で用いられるのか，またPFVとIPFVのどちらの動詞の使用も可能な文脈において，PFV・IPFVの“絶対的対立”である「同時性・非同時性」が中和される場合，PFVとIPFVの動詞はどのような対立を持つのだろうか．何らかの文法的といえる傾向が見られるのか，もしくは意味内容や言語外事実に差異が生じるのか．次章では，対立の中和の結果生じる選択性に関係する諸要素について，考察を試みる．ここでは，異なる文脈やテキストを異にしたPFV・IPFVの例文をそれぞれ並べて比較，考察を行うよりも，同じテキスト中や似た文脈の用例を考察することで，PFV・IPFVの相互互換性や類義性を考察する．

3. 選択性に関係する諸要素

3.1. 事象の一般化と具体化

恒常的事実を述べる場合には一般にIPFVが主に使われ，個別的事実にはPFVが用

[15] スラヴ語では，PFVの現在形は実際には未来の動作を意味するが，ラトヴィア語のPFVに未来の意味はない．

[16] praesens effectivumという用語は，スロヴェニア語の遂行動詞を例にŠkrabecが唱えた用語とされる．(Staltmane 1958 : 198)

いられるが，katru dienu「毎日」や vienmēr「いつも」，parasti「たいてい」といった習慣や頻度を示す状況語は PFV・IPFV どちらの動詞とも結びつくことができる．よって以下の例文のように，毎日行う習慣となっている行為は２つの動詞で示すことが可能である．

(18) Es katru dienu <u>lasu</u> avīzes.
I every day read, impf. pres. newspapers
私は毎日新聞（複数）を読む．

(19)Es katru dienu <u>izlasu</u> 2 avīzes.
I every day read, pf. pres. 2 newspapers
私は毎日２紙の新聞を読む．

上の２つの例文の違いは補語であるが，ここで前面に出てくるのは「一般・具体」の意味的対立である．アスペクト論における「一般・具体」の対立は，両アスペクト動詞が補語の具体性により PFV と IPFV に解釈できることを部分的に説明するために Kalnača が元々用いた概念（1.3.を参照）である．しかし PFV・IPFV の対立が中和されるような場合においてこの概念は有効性を持つと考えられる．PFV はこの場合に動作の及ぶ対象の具体的数量を示している．また次の例文(20)では，IPFV がそもそもケーキを食べるか食べないかを示しているのに対し，PFV は限られた期間において限られた数量のケーキを食べることが示されている．

(20) Varētuarī teikt, ka <u>neēdu</u> kūciņas, bet tad es melotu
could also say, inf. that not eat, impf. pres. cakes but then I would lie
– gadā vienu, varbūt divas kūciņas <u>apēdu</u>.
year 1 maybe 2 cakes eat, pf. pres.
ケーキは口にしないとも言えるけど，それだと嘘になってしまう．年に１個，もしかしたら２個ケーキを食べる．

「一般・具体」の表現には数量を示す補語を必ずしもとらず，次の例文(21)では電話をかける日が「一般・具体」の比較基準となっている．PFV がより具体的な行為を示すのに対し，IPFV はより一般的な行為を示している．

(21) Noteikti Mātes dienā pie-zvanu mammai. Bet es zvanu
definitely mother day call, pf. pres. mammy but I call, impf. pres.
mammai arī citās dienās.
mammy also other days
母の日には必ずママに電話をかける．でも他の日にもママに電話をかける．

一方で「一般・具体」の意味対立では説明の難しい例文もある．例えば出生率や病気の死亡率を述べるような文脈においては，具体的な人数や状況が示されているにもかかわらず，PFV・IPFV どちらの動詞の使用も可能であり，一般的事象を IPFV が，具体的事象を PFV の動詞が示すといった説明は難しくなる．

(22) Katru gadu Latvijā dzimst / piedzimst 20000 bērnu.
every year Latvia be born, impf. pres. / pf. pres. children
毎年ラトヴィアでは2万人の子供が生まれる．

(23) Katru gadu pasaulē badā mirst / nomirst 11 miljoni cilvēku.
every year world hunger die, impf. pres. / pf. pres. milion people
毎年世界では飢餓で 1100 万人が亡くなる．

また以下のようなまとまったテキスト(24)を見てみる．

(24) Ar malāriju katru gadu saslimst ap 200-300 miljoni.
with Malaria every year get ill, pres. about milion
No tiem katru gadu nomirst aptuveni 1-1,5 miljoni.
from they every year die, pf. pres. approximately milion
Galvenokārt mirst bērni (90%), kas slimo ar tropisko malāriju
mainly die, impf. pres. children who be ill, pres. with tropic malaria
un dzīvo Āfrikā uz dienvidiem no Sahāras tuksneša.
and live, pres. Africa to South from Sahara desert

毎年2-3億人がマラリアにかかる．そのうち毎年約 100 万から 150 万人が死亡す

る（A）．主に死亡する(B)のは，熱帯性マラリアにかかっており，サハラ砂漠以南のアフリカに住む子供(90%)である．

（A）はマラリア感染者中の死亡者数が，（B）はさらに（A）の死亡者数の 90%を占める子供が具体的に示されている．文の内容自体にはどちらにも具体性があり，（A）に PFV が，（B）に IPFV が用いられている．この場合（A）の内容は直前の文を受け（no tiem「そのうち」）より具体的であり，その具体化された（A）の死亡者の特徴が（B）では逆に一般的事例として述べられている，と解釈できる．

ただし（A）を IPFV に，（B）を PFV の動詞にすると，具体性の尺度（もしくは一般性の尺度）のベクトルは変わり，（A）で全体の死亡者を一般的に述べ，（B）で割合的に多い死亡者の特徴を具体的に述べている，と解釈できる．

つまり，ある事実を述べる際事実そのものの持つ一般性や具体性に合わせて PFV・IPFV が選択されるほかにも，場面や話者の判断により話者が PFV を使用することにより事実を「具体化」，IPFV を使用することにより事実を「一般化」をする際に PFV・IPFV が用いられると考えられる．つまり「一般・具体」の対立は相対的な意味対立であり，それを表現する「一般化・具体化」のプロセスは選択的性格を持つといえる．

3. 2. 同語反復の回避

一般に同じテキストや文中で同語反復の回避は，文体論において定式化された法則であるか，それとも不文律であるかは別として，多くのヨーロッパの言語と同じようにラトヴィア語でも見受けられる文体論の傾向である．一般にその語の品詞は名詞であることが多いと考えられるが，動詞においても同語反復の回避の傾向があり，この文体論的な文の調整において接頭辞の有無による PFV・IPFV の動詞の選択がなされると考えられる．これは特に，IPFV の動詞が限界達成に対し無関与である場合において観察できるといえる．

(25) Vārdadienā	atnāk	draugi,	un	visi	nāk	neaicināti.
Name day	come, pf. pres.	friends	and	all	come, impf. pres.	uninvited

名前の日には友人たちがやってくる．そして皆招待されずにやってくる．

5人のインフォーマント[17]によれば，上の例文(25)の2つの「やってくる」のPFV・IPFVは互いに置き換えが可能であるが，句読点法により，動詞を省略する際には—(ダッシュ）を書き，同じ動詞を繰り返すことは体裁が悪いとした．

この同語反復の回避の傾向は現在時制に限らず過去時制においても見られる．例えば，新聞などの報道文において，一定期間に生まれた赤ん坊6人をそれぞれ列挙し紹介していく際，筆者が明らかな意図を持ってなるべく異なる動詞や動詞句を使っていることがわかる．(Zemgales ziņa.「ゼムガレ地方のニュース」1997年11月22日付）ここでは「生まれた」という行為に対してPFVのpiedzima（2回），IPFVのdzima（1回）という直接的な表現のほか，成句を使った表現nāca pasaulē「世界に来た」や，その他の表現pieteica sevi šai pasaulei「この世界に自分を呼んだ」，par savu piedzimšanas dienu izvēlējās 18. novembri「11月18日に自分の生まれる日を選んだ」が用いられている．「生まれた」という同じ事実を示す同じ文脈に対して，PFVのpiedzimaもIPFVのdzimaも同等に用いられていることは，過去時制においても中和の現象は観察できるということである．

さらに交通時故での死者に関する報道文を例に挙げても，同文中におけるPFV・IPFVの併用が見られる．病院に搬送途中で亡くなった場合は，元々の「死ぬ」という動詞の語彙的意味に加えてPFVに特徴的な状態の移行（生から死への状態変化）を表すことから，搬送途中で亡くなった場合にはPFVの使用が期待できるが，実際にはIPFVの使用も確認できる．ここでのIPFVに「死につつあった」という限界達成への志向の意味や，「死につつあって死んだ」という限界達成への志向と限界達成の意味をここで感じることは難しい．

(26) Notikuma vietā <u>mira</u> divi cilvēki, bet divi cilvēki <u>nomira</u>
event place die, impf. past. 2 people but 2 people die, pf. past.
ceļā uz slimnīcu.
way to hospital
事故現場で2人が死亡，また2人は病院に向かう途中で死亡した．

(27) Trīs skolēni <u>nomira</u> notikuma vietā, bet viens tika nopietni
3 pupils die, pf. past. event place but 1 get, past. seriously

[17]インフォーマントにはラトヴィア語を日常的に使用する20代男性，20代女性，30代男性，40代女性，50代女性に協力していただいた．

ievainots	un	mira	slimnīcā.
injured	and	die, impf. past.	hospital

3人の生徒が事故現場で死亡，また1人は重症を負い，病院で死亡した．

3.3. 主観性の余地

ここで3.1.で挙げた例文(22)(23)に再び戻る．

(22) Katru	gadu	Latvijā	dzimst	/ piedzimst	20000	bērnu.
every	year	Latvia	be born, impf. pres.	/ pf. pres.		children

毎年ラトヴィアでは2万人の子供が生まれる．

(23) Katru	gadu	pasaulē	badā	mirst	/ nomirst	11	miljoni	cilvēku.
every	year	world	hunger	die, impf. pres.	/ pf. pres.		milion	people

毎年世界では飢餓で1100万人が亡くなる．

この2つの例文を5名のインフォーマントに見せたところ，3名のインフォーマントが，どちらの例文においてもIPFVの無接頭辞動詞の方を「より堅い」「より厳しい」語感を持っているとした[18]．さらに1名のインフォーマントは，「問題の深刻性やアクチュアル性を表現するにはIPFVの方が効果的である」とした．この意見は「今こうしている間にも」といった発話時点での動作の同時性を強調しない，「毎年」という大きな時間幅の中での事実を一般的事実として述べる場合においても，IPFV本来の同時性の表示を話者が，もしくは読者が感じる可能性があることを示唆させ興味深い．一方で接頭辞動詞のPFVのpiedzimst, nomirstについては，同じ2名のインフォーマントが「語感が和らぐ」とした．

アスペクト論の立場から動詞接頭辞を見ると，伝統的に「限定」(determinative) に分類される，動作の少量性を示す接頭辞pa-がある．たとえ標準的な語彙的意味（ここでの語彙的意味は，言語化して辞書記述ができる意味として理解する）が「"少し"何かをする」であっても，そのアスペクト的意味が薄れ，代わりに話者の行為への情緒 (affectness) 的態度を示すと思われる用例が特に口語において見受けられる．例えばļoti padomāju「私はとてもよく考えた」，es vairāk palutinu「私の方が（彼を）より甘

[18] ちなみに2名のインフォーマントは，PFV・IPFVの差異を特に感じることはできないと回答した．

やかす」のように，ļoti「とても」や vairāk「より多く」のような語が，本来相容れにくい少量性のアスペクト的意味が加えられたはずの接頭辞 pa-動詞と共に用いられることがある．PFV と IPFV を比較した上の２つの例文に対するインフォーマントの「語感が和らぐ」という意見は，語調を和らげたり，一見話者の主観的態度が入るとは考えにくいような内容（ここでは出生率や病気の死亡率）のテキストにおいても，PFV・IPFV の対立を形成する形式的接頭辞の選択が，主観化[19]（subjectification）の機能を担っていることを示唆させるが，これは今後の課題である．

4. 結びにかえて

ラトヴィア語のアスペクトカテゴリーの文法化の程度が低い理由としてよく挙げられる，PFV・IPFV の対立がすべての動詞に及んでいないことのほかに，「同時・非同時」という絶対的対立が中和される際に，文体や語調の調整のように，文法的規則に制限されにくい，話者による PFV・IPFV の選択幅が広いことが大きな要因であるといえる．その際，選択性に関与する諸要因が相互にどう関係しているのかは今後の課題である．また形式的接頭辞によりアスペクト対立を持つ動詞を語彙的意味グループに分類し，PFV・IPFV の対立が中和されやすい動詞ペアとそうでない動詞ペアを綿密に調べることが必要であろう．

接頭辞が多義性を持っていることから，接頭辞そのものや接頭辞動詞の意味記述も，語彙化して記述することが難しい点から，ラトヴィア語のアスペクト論においては，動詞接頭辞と接頭辞動詞のより深い意味論的，語用論的研究が必須である．

略号

sg.=単数，pl.=複数 pres.=現在形，past=過去形，fut.＝未来形 pf. *=perfective（完了アスペクト，PFV），impf. *=imperfective（不完了アスペクト，IPFV）(*ここでは接頭辞によるアスペクト対立を持つ動詞にのみ表示）apresp.=能動現在分詞，apastp.=能動過去分詞，ppresp.=受動現在分詞，ppastp.＝受動過去分詞 be.=動詞 būt「ある，いる」，inf.=不定形，refl. =再帰形，not.=否定辞

---

[19] ここでは，「命題に対する話者の主観的信念や態度に基づく度合いが高くなる語用・意味論的プロセス」と定義しておく．（Traugott 1995 : 31）

参考文献

Bergmane.A. et al. 1959. *Mūsdienu latviešu literārās valodas gramatika I.- fonētika un morfoloģija*, Rīga

Bergmane.A. et al. 1962. *Mūsdienu latviešu literārās valodas gramatika II.- sintakse.* Rīga.

Bondarko. A. 2001. *Teorija funkcional'noj grammatiki.* Vtoroe izdanie. Moskva.

Comrie. B. 1976. *Aspect.* Cambridge.

Holvoet,A. 2001. *Studies in the Latvian verb*, Kraków. 132-158.

Kalnača, A. 2004. Darbības vārda veida kategorijas realizācija latviešu valodā. *Linguistica Lettica. 13.* Rīga. 5-34.

Kalnača A. 2008. Saliktās tagadnes lietojums mūsdienu latviešu valodā. *Valodas prakse : vērojumi un ieteikumi. 3.* Rīga. 61-68.

Karavanov, A. 2006. Denotativnyj i modusnyj aspekty semantiki attenuativnosti. *Vestnik moskovskogo universiteta . Serija 9. Filologija. No.4.* Moskva. 104-111.

Lokmane I. 1988. Veida un laika nozīmju mijiedarbe latviešu valodas darbības vārda sistēmā. *Latviešu valodas kultūras jautājumi. 24. laid.* Rīga. 109-118.

Semikolenova. E. 2002. Izbiratel'nost' v upotreblenii vida glagola kak sledstvie processa nejtralizacii. *Kul'tura narodov Pričernomor'ja. tom. 37.* Simferopol'. 176-182.

Staltmane V. 1958a. Perfektīvā un imperfektīvā veida verbu gramatiskais raksturojums mūsdienu latviešu literārajā valodā. *Latvijas PSR ZA Vēstis 6.* Rīga. 27-36.

Staltmane V. 1958b. Priedēkļa verbu veidiskās nozīmes mūsdienu latviešu literārajā valodā. *Latvijas PSR ZA Vēstis 7.* 13-22.

Staltmane, V. 1958c. *Verbu veidi mūsdienu latviešu literārajā valodā.* Doktora disertācija. Rīga

Šeljakin M. 1983. *Kategorija vida i sposoby dejstvija russkogo jazyka : Teoreticheskie osnovy.* Tallin.

Traugott E.C. 1995. Subjectification in grammaticalisation. *Subjectivity and subjectivisation, Linguistic Perspectives.* Cambridge. 31-54.

堀口大樹 2009. 「ラトヴィア語の動詞接頭辞—アスペクト的意味と語彙的意味」 東京外国語大学大学院 修士論文

Aspectual opposition and facultativity of its expression in Latvian

Daiki HORIGUCHI

The aim of this article is to show an outline of aspectual expressions in Latvian and to shed light on the facultativity of the use of perfective and imperfective verbs mainly in general present tense.

The core of aspectually oppositional system in Latvian is indeed a verbal pair – perfective and imperfective – the former marked by a so-called perfectivizing or formal prefix. But in Latvian in general aspect expresses itself morphologically (prefixes and suffixes), tensely (resultative compound tense) and syntactically (taxis or complements). Here we found two semantic features of aspectual opposition between perfective and imperfective – telicity and simultaneity. Unlike simultaneity, telicity can not be considered as privative one.

The facultativity of the use of perfective and imperfective is often observed in general present tense where the privative opposition "simultaneity – non-simultaneity" is neutralized. In this case, the choice of a verb can be determined by some relative and subjective factors. Generalization / concretization of a fact is realized respectively by unprefixed imperfective verb / prefexed perfective verb. In some sentences verbs of aspectual pair are used only to stylize a text, avoiding repetition of the same verb.